



生き物飼い方講座(水
生昆虫編)

特集

指導者が まず体験

琵琶湖博物館は2005年度の1年間で約8万人、開館以来2006年3月末までにのべ75万人、県内の21万人の児童生徒が学校団体として見学に訪れています。また、2005年度の1年間で約1万人の児童生徒が体験学習を行いました。学校団体など、子どもたちの学習に、より効果的に博物館を利用してもらうためには、指導者のみなさんに琵琶湖博物館のことや琵琶湖のことをよく知ってもらうことが重要であると考へ、指導者研修を実施しています。2006年度4月～8月だけで、700名あまりの指導者が研修を受けてくださいました。



交流グループ主査(教育学)
中村公一

写真は、体験学習「化石のレプリカづくり」のようす

子ども団体の利用形態はさまざま

子どもの団体が博物館を利用する目的は、そのときの指導者のねらいにより、さまざまです。多いものからあげると、次のようになります。

行事型＝学校行事、学年行事として遠足、修学旅行の見学地としての利用

授業型＝教科などの学習の効果を高めようとしての利用

研究型＝総合的な学習の時間や中学校での選択教科での研究活動としての利用

ミニすだれ(「わら細工
をつくろ」)



学習のねらいは理科や総合的な学習の時間での「環境」をテーマにしたことが多いのですが、社会科や図画工作・美術、国語、技術・家庭科などでも学習活動を展開されています。

博物館の利用形態もさまざまなものになります。多いパターンは次のようになります。

展示見学＝展示室の見学のみで学習するパターンです。指導者が作成したワークシートや琵琶湖博物館のサポートシートを利用しながら、見学をする場合もあります。
概要説明＋展示見学＝あらかじめ琵琶湖博物館についての説明を受けてから展示室を見学するパターンです。

体験学習＋展示見学＝展示室を見学する他に、博物館の実習室や生活実験工房などで体験学習も実施するパターンです。琵琶湖博物館は展示室にも、体験学習型の展示が数多くあり、展示室の見学だけでも十分楽しんでもらえますが、そのときの学習の

ねらいをより深めるために、子どもたちは五感をフルに使って、体験を通して学習をします。おもな体験学習の内容は後に紹介します。
講義＋展示見学＝展示室を見学する他に、琵琶湖の概要や琵琶湖・淀川水系の魚や水質、滋賀県で採集される動植物や化石についての話、環境問題の話などを、博物館教員や学芸員から話を聞くパターンです。

琵琶湖博物館体験学習

琵琶湖博物館では体験学習を実施しています。個人向けには、原則として第2・第4土曜日に「琵琶湖博物館わくわく探検隊」として、月ごとにメニューを変え、子ども向けの体験学習プログラムを実施しています。ここでは団体向け体験学習のおもなメニューをご紹介します。

特殊な樹脂で再現した
ブランクトン(開発中
メニュー「ブランクト
ンの模型づくり」)



石こうでつくった三葉虫やアンモナイト(「化石のレプリカをつくらう」)



琵琶湖のプランクトンを観察しよう

琵琶湖にすむプランクトンを採集して、顕微鏡で観察します。神秘的なミクロの世界に興味をいだき、琵琶湖の生態系や水環境に関心を持つきっかけとします。また、顕微鏡観察の基礎的な技能を身につけます。

化石のレプリカをつくらう

400万年の歴史を持つ琵琶湖の周りの地層には、過去の生き物の化石が数多く残されています。そんな化石を紹介しながら、古代の琵琶湖とそのほりにすんでいた生き物たちに興味をもっていただきます。そして子どもたちに人気のあるサンヨウチュウやアンモナイトなどのレプリカ(複製)を石こうで作ります。

ヨシ笛をつくらう

琵琶湖岸に成育しているヨシは、周囲の風景とともに古来より琵琶湖らしい自然のままの景観を作っています。ヨシ帯は県の鳥であるカイツブリやオオヨシキリなどの野鳥や多くの魚のすみかとなっています。水質の浄化にとっても大切な植物です。また、葎(よぶ)やヨシぶき屋根などに利用され、人々の暮らしと深く関わってきました。琵琶湖の環境を守る上で大切なヨシを使って、素朴な音色の出るヨシ笛を作ります。

ヨシ笛(「ヨシ笛をつくろう」)

わら細工をつくろう

今は見かけなくなつた米俵や葎を編む技法を使って、自分だけのかわいいミニすだれを作ります。わらを有効に使って、いろいろな生活用具を作っていた昔のくらしの一端を紹介します。

* * *

以上が体験学習の代表的なメニューです。この他にも、そのときの学習のねらいに応じて、可能な限りご相談に応じています。

現在、開発中のメニューも紹介します。1つは、「プランクトンの模型づくり」です。これは80 以上のお湯につけるとやわらかくなる樹脂でつくりまます。粘土細工のようにつくれますが、透明感のあるプランクトンが再現できます。プランクトン観察の際、平面でスケッチをしますが、立体で再現することにより、より深くあらゆる方向からプランクトンを観察することにつながります。

2つ目は、「3Dびわ湖」です。琵琶湖の形は衛星写真や地図などでよく目にしますが、深さまで意識することは少ないと思います。琵琶湖の最深部は約100mであると知っている人も、それが琵琶湖の広さに対してどのくらいの深さがあるのかまで認識してもらつたことや、西側と東側の深くなつていくようすの違いなどを作業をすることで理解してもらつたことをねらいとしています。

増えている教員・指導者研修

博物館の学校利用をより効果的に進める上で、指導者自身が博物館をよく知ってもらつたことが大切であると考え、博物館では教員・地域指導者向け博物館講座を開催しています。

講座の種類も徐々に増やし、表のようについに2006年度は7講座全16回行っています。開館時より、滋賀県総合教育センターの教員研修などで、琵琶湖博物館を会場としてさまざまな研修が行われていますが、2003年度より琵琶湖博物館主催でも研修会を開催しています。

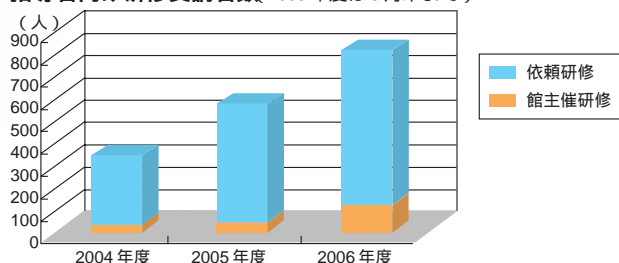
グラフは最近3年間の指導者研修受講者数です。博物館主催の学校園教員・地域指導者対象博物館講座を開設していくことにより、研修を受けた先生・指導者が増加しているのがわかります。依頼研修とは、滋賀県総合教育センターの研修や県や市・郡などの理科部会、社会科部会などです。最近では校内研修の一環として、学校全員の先生方でお越しになる場合も増えてきました。

2006年度は8月末までで、約700名の指導者が研修を受けていただいています。「1人の指導者の向こうには40名の児童生徒がいる」という思いで、少しでも魅力的な研修をすすめていこうと考えています。

2006年度 琵琶湖博物館主催 学校園教員・地域指導者対象博物館講座

指導者のための博物館利用講座(基礎編)	2回
先生のための湖沼学基礎講座	2回
生き物飼ひ方講座	2回
先生のための川の生き物調査	1回
指導者のための博物館利用講座(体験編)	2回
指導者のための博物館利用講座(応用編)	2回
指導者のための淡水魚類学専門講座	5回

指導者向け研修受講者数(2006年度は8月末まで)



深さが理解しやすい立体的な琵琶湖(開発中メニュー「3Dびわ湖」)

